

「透明な檻の中で 2」

—今を生きる灯りの物語—



KHJ岡山きびの会

“ふじさん”

透明な檻の中で 2
—今を生きる灯りの物語—

目 次

序章：透明な檻	2
第 1 章：予感の風	3
第 2 章：沈黙の声	4
第 3 章：檻の内側にいたのは	4
第 4 章：火を囲む人たち	5
第 5 章：克己の孤独な戦い	6
第 6 章：息をする	6
第 7 章：灯りのかたち	7
第 8 章：また歩き出す	7
第 9 章：小さな声の実験	8
第 10 章：家族を繋ぐ練習	9
第 11 章：予期せぬ交差点	9
第 12 章：不確かな応答	10
エピローグ：灯りの詩	11

序章：透明な檻

悠希は、静かに世界から距離を置いた。いじめ、家庭の緊張、言葉にならない不安。誰にも届かない声を抱えたまま、彼は部屋という名の宇宙に閉じこもる。

そこは、誰にも見えない「透明な檻」。外からも、内からも、見えないけれど確かに存在する場所だった。様々な社会の本音と建て前の常識という檻の中で、当事者や当事者家族が、まるで目に見えない糸で縛られているように、静かに、けれど確かに傷ついていく。

家族の肖像



克己と静香の夫婦には、新婚当初、なかなか子供ができない時期があった。それだけに、待望の命を授かった喜びはひとしおで、悠希が幼稚園から小学校低学年までは、まさしく絵に描いたような幸せな家族に見えていた。週末には公園へ行き、年に一度は旅行に出かけ、父は厳格さの裏で時折見せる優しさで、母はいつも穏やかな笑顔で、家庭を満たしていた。

静香は、幼い頃からその可愛らしさゆえに同性の女性からいじめを受けることも多く、控えめな性格で自分の主張をなかなか通せない人であった。そのため、言葉で説明するよりも、場の空気を読み、相手の意図を察する「以心伝心」こそが、波風を立てずに生きる術だと無意識に信じていた。

親である克己と静香は、子供には自分のやりたいことをやらせたいと心から思っていた。同時に、社会的に尊敬される人になること、そしてしっかり自律できることを強く望んでい

た。さらに、常識にとらわれない自由な精神で生きることにも期待しており、この相反する願いが、悠希に無言の重圧を与えていた。克己もまた、幼馴染であった静香と環境が似ていたせいか、肝心な想いは言葉ではなく態度で示す「以心伝心」を真の絆と信じ込んでいた。引きこもりの状態についても、克己は「自分のやれることをやっているのも人生の歩き方だ」という理解を示そうとはしていたが、その本心は悠希に届いていなかった。

だが、その幸福なリズムは、悠希が小学校3年生か4年生になった頃から、ゆっくりと、しかし確実に崩れ始めた。最初の「体調不良」による欠席が、いつしか「行きたくない」という言葉に変わり、不登校へと進んでいった。

父・克己は「なぜうちの子が」というプライドと焦燥に苛まれ、厳しさを募らせた。母・静香は夫と学校との間で板挟みになり、笑顔を失っていった。

さらに、不登校の問題が深まるにつれ、夫婦は学校など教育機関が持つ「世間体を重んじる事なかれ主義」を少しずつ感じ始めていた。面談では「学校に来させよう」という言葉は繰り返されるものの、悠希の本当の苦しみに寄り添う言葉は少ない。それはまるで、学校側の「問題を起こしたくない」「数字を悪くしたくない」という保身のための形式的な対応に思えた。この外からの冷たい圧力もまた、家庭内の閉塞感を強める一因となっていた。

そして、悠希自身もまた、家族の期待と自分の現実との間で身動きが取れなくなり、部屋という名の宇宙に閉じこもることを選んだのだった。

第1章：予感の風

その朝、悠希は夢の中で見た扉の感触を、まだ指先に残していた。冷たくもなく、温かくもなく、ただ「在る」としか言いようのない存在感。目を覚ました部屋は何も変わっていないのに、空気の密度が少し違っていた。

窓の外では、風がひとつの葉を追いかけていた。まるで、何かを伝えようとしているかのよう。

彼はふと思う。「この檻は、もしかしたら、外から見えないだけじゃない。内側からも、見えなくなっていたのかもしれない。」

その瞬間、胸の奥に小さな痛みが走る。それは恐れではなく、懐かしさに近いものだった。かつて誰かに手を伸ばした記憶。拒まれた記憶。けれど、それでもなお、誰かを信じた記憶。

彼は机の引き出しから、ずっと開けられずにいたノートを取り出す。そこには、かつて書きかけてやめた言葉たちが眠っていた。

「ぼくはここにいる。」

その一行を見つめながら、彼は思う。

——この言葉の続きを、今なら書けるかもしれない。

第2章：沈黙の声

母・静香は今日も、笑顔で「大丈夫よ」と言った。父・克己は今日も、何も言わずに新聞をめくった。学歴社会を努力と忍耐で勝ち抜いてきた彼は、「自分の息子なら、できないはずがない」という無言の信念に縛られていた。その厳しさは、激励というよりも、むしろ息子を突き放す冷たさとなって部屋に漂っていた。

そして悠希は、今日も声を出さなかった。

悠希は、幼い頃から親の態度の奥にある感情を察することが得意だったためか、「家族であれば、以心伝心で自分の気持ちは親に伝わる」と無意識に勘違いしていた。この「言葉にしないことが美德」とする家族の無言の圧力は、悠希の内面にも深く根付いていた。

彼は、両親が期待する「社会的に尊敬される人」や「自律した精神」の像と、内なる自分の純粋な欲求との間に、埋めがたい乖離を感じていた。そして、その正直な「やりたいこと」や「助けてほしい」という願いを、両親の前に晒すことに、耐えがたい「気恥ずかしさ」を覚えていた。親が言葉で説明することを苦手とし、感情を抑える姿を見て育ったため、悠希もまた、自分自身の内なる声を発揮すること、ましてやそれを他人（親を含む）に説明することに、強烈なためらいを覚えたのだった。だから、自分がどれほど苦しいか、どれほど助けを求めているかを、言葉で説明する術を持たなかった。

けれど、その沈黙の中には、言葉にならない叫びがあった。

「どうして誰も、本当のことを言わないの？」

「どうして、ぼくの痛みは“わがまま”になるの？」

彼は、相手に伝わるように言葉で説明することの必要性を、なかなか理解できないでいた。そして、その未熟さが、親子の間の溝を深くしていた。

学校では「適応」が求められ、家庭では「理解」が期待される。

でもそのどちらも、彼の「今ここにいる」という事実を、まるで見ていないように感じられた。

ある夜、彼は夢の中で、檻の内側に文字が刻まれているのを見つける。それは、かつてこの檻にいた誰かが残した言葉だった。

「ここにいた。あなたも、いるのなら、どうか忘れないで。」

その言葉が、彼の胸の奥で、静かに灯をともす。

第3章：檻の内側にいたのは

母・静香は、ずっと「ちゃんとした母親」であらうとしていた。幼馴染の頃から憧れ、努力と実績を積み重ねた夫・克己を尊敬していた。だからこそ、夫の築いた「正しさ」の枠から外れないよう、近所の目、親戚の言葉、学校からの連絡帳。それらに「恥ずかしくないよ

うに」振る舞うことが、家族を守ることだと信じていた。

子供の頃にいじめを受け、自分の意見を主張することを諦めてきた静香にとって、「世間体」を重んじることは、再び傷つかないための防衛本能でもあった。しかし、悠希の不登校という問題が深まるにつれ、克己の厳格な態度と、言葉なくして理解を求める克己の不器用さが、以前は共感できていたはずなのに、まるで水と油のように合わないと感じるようになっていた。

だが、夫が彼女に抱く尊敬の念と、自分の想いを伝えられないもどかしさは、夫婦の間に言葉として通い合うことはなかった。彼は「以心伝心」を信じ、肝心の想いを態度や言葉で伝えられず、その距離感が、いつしか二人の間を冷え込ませていた。

でもある日、息子・悠希がぽつりとつぶやいた。

「お母さん、ぼくのこと、誰かに説明しなくていいよ。」

その言葉が、胸の奥にずしんと響いた。説明しようとしていたのは、誰のためだったのか。守ろうとしていたのは、誰の顔だったのか。

その夜、静香は鏡の前で自分の顔を見つめた。そこには、疲れた目と、まだ消えていない希望があった。

「わたしは、わたしの物語を生きていいんだろうか。」

その問いが、檻の鍵を少しだけ緩めた。

第4章：火を囲む人たち

静香が初めて家族会に足を運んだのは、「何か解決のヒントがあるかもしれない」と思ったからだった。けれど、そこにいたのは、答えを持っている人たちではなく、それぞれの痛みを抱えながら、ただ静かに話を聞く人たちだった。

「うちの子も、もう三年になります」

「私も、最初はどうしていいかわからなくて…」

「怒鳴ってしまったこと、今でも後悔してます」

誰かが話すたびに、静香の中の何かがほどけていった。

「わたしだけじゃなかった」

「この気持ち、わかってくれる人がいる」

その日、静香は初めて「助けてほしい」と言えた。誰かに寄り添ってもらうことが、こんなに温かいなんて、知らなかった。

そして、数ヶ月後。今度は静香が、初めて来た人の隣にそっと座り、こう言った。

「大丈夫。ここでは、泣いてもいいんです。」

第5章：克己の孤独な戦い

静香が家族会に出かけるようになってから、克己の家での時間は、以前にも増して重苦しいものになっていた。静香は確かに変わった。笑顔が増えたが、それは克己に向けられたものではなく、彼女自身の内側から発するもののように見えた。その変化は、彼がこれまで築いてきた「完璧な家族」という名の城壁に、静かにひびを入れるものだった。

彼は「一家の主」としてのプライドで、孤独と向き合おうとした。悠希のひきこもりを「人生の歩き方の一つ」と理屈で理解しようとしても、感情がそれを許さない。「自分のやりたいことをやらせたい」という願いと、「社会的に尊敬される人になってほしい」という期待が、心の内で激しく衝突する。

ある日の深夜、克己は水を飲みにもリビングへ出た。その時、窓の外、庭の隅に佇む悠希の姿を目撃した。悠希はただ、暗い夜空を見上げている。その姿は、まるで宇宙を漂う孤独な星のようで、「しっかり自律しろ」という克己の厳格な教育論が、音を立てて崩れるのを感じた。

「あいつは、ここで、自分のやれることをやっている。」

頭ではそう理解しても、胸は締め付けられる。彼は、自分が感情を抑え、言葉を尽くすことを諦め、「以心伝心こそが真の絆」と信じていたのは、ただ自分の感情的な脆弱さを隠すための言い訳だったと、初めて悟った。

克己の「透明な檻」―それは、彼自身が周囲の期待に応えるために、自ら作り上げた、感情の表現を許さない、冷たく硬いプライドだった。彼は今、その檻の中に、妻や息子ではなく、自分自身が閉じ込められていたことを知る。

彼は静かに自分の部屋に戻り、新聞を広げた。活字はもう頭に入らない。彼は、人生で初めて、自分が何を望み、何を恐れているのかを、誰にも言わず、ただ一人、探り始めていた。

第6章：息をする

部屋の隅にうずくまっていた悠希。時計の針の音が、まるで心臓の鼓動をなぞるように響いていた。

「もう、どこにも行けない」

「誰にも、わかってもらえない」

「このまま、消えてしまいたい」

そんな言葉が、頭の中をぐるぐると回る。

けれど、ふとした瞬間、窓の外から風の音が聞こえた。カーテンがふわりと揺れて、その

隙間から、夕暮れの光が差し込んだ。

その光は、あたたかくも冷たくもなかった。ただ、そこに「在る」だけだった。でも、その「在る」ことが、なぜか涙を誘った。

彼は、ゆっくりと手を伸ばした。光に触れたわけじゃない。ただ、伸ばしただけ。けれど、その動きは、確かに「生きている」証だった。

「今、ここにいる」

「まだ、終わっていない」

「まだ、始まってもない」

その夜、彼は初めて、自分の呼吸の音に耳を澄ませた。

それは、誰にも聞こえない、小さな小さな音だったけれど、彼にとっては、世界でいちばん確かな音だった。

第7章：灯りのかたち

朝の光が、カーテン越しに部屋を包んでいた。昨日までと同じ景色。けれど、悠希の中には、確かに何かが変わっていた。

悩み続けた日々。何度も「もう無理だ」と思った夜。誰にも届かないと思った声。それらすべてが、今では遠い夢のように感じられた。

夢——でも、それは忘れたい過去ではなく、今の自分を形づくった、大切な記憶だった。

彼は立ち上がる。足元はまだおぼつかない。けれど、心の中にともった灯りが、「大丈夫」と、そっと背中を押してくれる。

ドアノブに手をかける。それは、世界とつながるための第一歩。けれど、何よりも大切なのは、「自分自身とつながる」ための一歩だった。

扉を開けると、風が頬をなでた。その風は、どこか懐かしくて、暖かかった。

彼は歩き出す。ゆっくりと、でも確かに。その歩みは、誰かに見せるためではなく、自分の物語を、自分の足で紡ぐためのものだった。

第8章：また歩き出す

数日ぶりに外に出た悠希は、思ったよりも風が冷たくて、思ったよりも世界がまぶしかった。心の中の灯りは、まだ小さく、頼りなかった。

それでも、確かにそこにあった。

けれど、日々はやさしくはなかった。すれ違う人の視線に、また心が縮こまる。何気ない

一言に、胸がざわつく。夜になれば、あの声がまた頭の中でささやく。

「やっぱり無理だ」

「お前なんか、変わらない」

そのたびに、彼は立ち止まり、うずくまり、時には涙をこぼした。

でも、今は知っている。涙のあとに、また朝が来ることを。

そして、自分の中にある灯りが、どんなに小さくても、消えないことを。

「また、歩こう」

「今日の一步は、今日だけのものだから」

彼は、泥のついた靴のまま、また一步を踏み出す。それは、完璧な一步じゃない。でも、確かに「生きている」一步だった。

第9章：小さな声の実験

数日間の外出から戻ったある夕方。悠希はリビングのテーブルに、静香が置いていったコーヒークップを見つけた。冷めきったカップの横には、昨日家族会に行った静香が、その日の様子を簡単に綴ったメモが添えられていた。「誰かの痛みが、誰かの灯りになる。今日は、そう思ったよ。」

悠希は、そのメモを見て、胸の奥が温かくなるのを感じた。そして、生まれて初めて、「感謝」を言葉で伝えたいという衝動に駆られた。

しかし、言葉は出てこない。親に感情を伝えることへの長年の「気恥ずかしさ」が、喉の奥に蓋をする。彼は鉛筆を持ち、そのメモの隅に何かを書き加えようとしたが、指が震えて字が崩れる。「ありがとう」というたった五文字が、まるで地球上で最も重い言葉のように感じられた。

結局、彼は何も書けなかった。その夜、静香が眠りについた後、悠希は静かに自分の部屋を出て、台所へ向かう。棚から新しいマグカップを出すと、静香が好きな種類の紅茶を淹れた。湯気は静かに立ち上り、あたりに微かな香りを広げる。

彼は、その温かい紅茶を静香の寝室のドアの前にそっと置いた。そして、その横に、小さな付箋を貼り付けた。

そこには、簡潔に二文字だけ書かれていた。

「これ」

翌朝、静香はその紅茶を見つけ、付箋を手にとった。彼女はすぐに、それが悠希の「言葉」であることを悟った。温かい紅茶が示す「ねぎらい」と、たった二文字の「これ」という不器用なメッセージは、彼女が家族会で聞いたどの言葉よりも深く心に響いた。

悠希の最初の「言葉の実験」は、声ではなかった。しかし、それは確実に、彼の「透明な檻」の内側から外の世界に向けられた、小さくも確かな一歩だった。

第 10 章：家族を繋ぐ練習

静香は、悠希の「これ」というサインをきっかけに、彼への接し方をさらに変えた。彼女は、正解を求めなくなった。ただ、悠希の「在る」ことを肯定した。

一方、父・克己は、新たな「宿題」に直面していた。新聞をめくる手を止め、彼は初めて息子に、自分の口から何かを伝えようと決めた。

ある週末の昼下がり。克己は、リビングの隅に座って熱帯魚の水槽を眺めている悠希に、声をかけた。

「悠希。」

声はひどく掠れていた。克己が発した言葉は、彼自身が予想していた厳格な「自律」や「将来」に関するものではなかった。

「お前が…小さい頃、一緒に作った、あのプラモデルは、まだあるか？」

悠希は振り返らない。無言だった。克己の脳裏には、悠希が小学生の頃、二人で熱中して作った宇宙戦艦の姿が浮かんできた。あの時、克己は完成させることばかりにこだわり、悠希の「もっと別の色を塗りたい」という主張を、頭ごなしに却下したことを思い出した。

「私は、あの時、お前のやりたいことを…」克己は言葉を探した。「きちんと聞かなかった。悪かった。」

「ごめん。」

このたった三文字の謝罪は、克己にとっては、何十年ものプライドと「以心伝心」の信念を打ち砕く、最も困難な言葉だった。

悠希は、ゆっくりと立ち上がり、リビングを出ていこうとした。克己は、彼の沈黙に再び絶望しかけた。

しかし、悠希は部屋のドアの前で立ち止まり、振り返ることなく、小さな声でつぶやいた。

「ある。」

それは、過去の共有された記憶に対する、短い肯定だった。まだ感情を交わすには至らない。だが、それは、二人の間に通じる、言葉という名の細い、細い糸の始まりだった。

第 11 章：予期せぬ交差点

悠希は、以前よりも長く、そして遠くまで外出するようになっていた。相変わらず人目を避けていたが、小さな身体的な歩みが、少しずつ世界との距離を縮めていた。

ある日の午後、彼は近所の小さな古本屋の前で立ち止まった。店の外に並べられた段ボール箱には、手書きのPOPとともに、安価な古書が並んでいる。悠希はふと、かつて興味を持っていた植物学の本を見つけ、手に取った。

その時、店の中から、一人の老人が出てきた。白髪で、優しい皺が刻まれた顔つきは、克己のような厳格さはなく、静香のような疲弊感もない。彼は店の主人だった。

「おや、それは珍しい本だね。もう絶版だよ。」老人は声をかけた。

悠希は反射的に身体をこわばらせた。言葉が、喉の奥に引っかかる。いつもなら逃げ出すところだが、手のひらに残る、紅茶のマグカップの温かさ、そして克己に「ある」と答えた時の微かな解放感が、彼の足をその場に留めた。

「あの…」

悠希は、本を握りしめ、自分でも驚くほど小さな声で、言葉を絞り出した。

「この…この本に、載ってる…シダは、どこに生えてますか？」

シダ。それは、悠希が小学生の頃に熱中し、いじめによって断念せざるを得なかった、彼の内なる欲求の象徴のようなものだった。それを口に出すことは、彼にとって、自分の秘密を他人に晒すような、耐えがたい「気恥ずかしさ」を伴う行為だった。

老人は、悠希の緊張を察したのか、深く追求することなく、ただ穏やかに微笑んだ。

「シダかね。ああ、いい趣味だ。この近くの、あの大きな神社の裏の湿地に、まだ生き残っているのを見たことがあるよ。」

その言葉は、命令でも、評価でもなく、ただの情報だった。悠希は、老人の静かな視線に、初めて「自分の存在が、ただ受け止められている」という感覚を得た。

「ありがとう…ございます。」

彼は、初めて自分から発した「ありがとう」という言葉とともに、その本を抱きしめて、古本屋を後にした。

第12章：不確かな応答

老人の言葉を頼りに、悠希は週末、神社裏の湿地へと向かった。

目的地に着いた悠希は、泥にまみれ、湿気を吸った空気の中で、確かに古書に載っていたシダの群生を見つけた。そのシダは、誰にも顧みられることなく、ただ自らの形で、静かにそこに「在った」。

しかし、その帰り道、彼は近所の顔見知りの母親グループとすれ違う。彼らは、悠希を見て、すぐに目をそらした。その中の一人が、遠ざかる悠希の背中に向かって、ひそひそと、しかし聞き取れる声で言った。

「…やっぱり、あそこんちは、まだ治らないみたいね。」

悠希の胸の奥で、第8章で打ち消したはずの「やっぱり無理だ」「お前なんか、変わらない」という声が、再び嵐のように渦巻き始めた。老人に受け止められた経験は、あまりにも小さく、現実の冷たい圧力は、あまりにも大きかった。

彼はまた、立ち止まってしまった。泥のついた靴、湿地のシダ、そして彼の心の中にある灯り。すべてが、この「世間の声」の前で、無力に思えた。

その夜、悠希は、机の上のノートに、古本屋で書きかけで終わらせた「ぼくはここにいる。」の下に、初めて正直な言葉を書き加えた。

「ぼくはここにいる。でも、ぼくの言葉は、たぶん、誰にも届かない。」

しかし、ノートを閉じる瞬間、彼は思い直した。届かなくても、言葉にした事実は消えない。そして、老人にシダのことを尋ねたあの瞬間に感じた、一瞬の自由と、自己肯定の温かさは、確かにあったのだ。

彼はもう一度、ペンを取る。

「…でも、それでも、ぼくは、また聞くだらう。」

届かないかもしれない言葉を、それでも投げ続けること。それは、透明な檻を外側から破壊するのではなく、内側から、世界と自分の間に、細い通路を作り続けるための、彼の孤独な、そして最も強い戦いだった。

エピローグ：灯りの詩

悠希の歩みは、まだ不安定で、目的地は決まっていない。しかし、彼の歩き方が、家の空気を確実に変え始めていた。

母、静香の心の中で、かつて囚われていた「透明な檻」は、今、ガラスのように薄く、外側の景色が見えるほどになっていた。彼女は、悠希がマグカップと「これ」の二文字で示した不器用な感謝を、彼との新しい言葉として受け取った。

父、克己もまた、静かな変化の中にいた。彼は相変わらず言葉数が少なく、不器用だ。しかし、夜、庭で悠希がただ空を見上げる姿や、リビングに一人座って思い悩んだ末、彼は「自律」や「成功」という言葉の重荷が、いかに空虚であったかを初めて感じた。そして、何十年ぶりに口にした「悪かった」「ごめん」という言葉の困難さが、彼自身の「透明な檻」一感情を抑え、言葉を伝えることを拒んだ己のプライドと孤独であったことを知る。

悠希は、まだ言葉で伝える難しさに直面するだろう。以心伝心が通用しない世界で、自分の内側の痛みを、相手にわかるように伝える練習は、生涯続く旅だ。彼は、世間の冷たい声に傷つき、自分の言葉が届かない無力感も知った。しかし、彼は今、知っている。誰にも届かないと思っていた「ぼくはここにいる」という叫びは、小さな灯りとなり、静香の心を照らし、克己の頑なな心に届き、そして外部の世界で、自分を受け止めてくれる「不確かな応

答」が、確かに存在することも知った。

生きるとは、完璧なゴールに到達することではない。透明な檻は、消えるのではなく、自分自身の一部として受け入れられる。灯りは、太陽のようにすべてを照らすのではなく、暗闇で立ち止まらないための、心臓の鼓動に似た微かな光として存在する。

そして、その光を頼りに、今日の一步をまた踏み出すこと。それは、家族それぞれが、自分の檻から抜け出すための、最も強く、最もやさしい奇跡だった。一物語を紡ぎ直すのは、いつでも「今」から始まる、小さな一步の連続なのだ。

令和7（2025）年 師走

KHJ 岡山きびの会 “ふじさん”